



ウツコイ

村上 碧 [著]

高橋ナツコ [原案]



ウソコイ

村上 碧 [著]

高橋ナツコ [原案]

徳間書店

ウソコイ

第一刷——2001年9月30日

著 者——村上 碧

原 案——高橋ナツコ

発行者——松下武義

発行所——株式会社徳間書店

東京都港区東新橋 1 - 1 - 16

郵便番号105-8055

電話(03) 3573-0111(代表)

振替00140-0-44392

(編集担当) 国田昌子・磯谷 励

印 刷——三晃印刷株

造 本——近代美術株

製 本——株明泉堂

©Ao Murakami, Natsuko Takahashi 2001, Printed in Japan
乱丁・落丁はおとりかえ致します。

I S B N 4 - 1 9 - 8 6 1 4 0 8 - 3

月に罪があるとしたら、それは夜しか輝かないこと……

人に罪があるとしたら、昼には月が見えないと知っていること……

目次

第一章	月の罪	5
第二章	月の壺	69
第三章	月の謝肉祭	112
第四章	月の街	163

装幀・花村
広

第一章 月の罪

1

渋谷という街は、おもちゃ箱のようだ。

鈴懸彰は、真正面のビルの壁面を眺めた。

巨大なスクリーンには、いま若い女性たちのカリスマとなっているアイドル歌手が映しだされている。

ハチ公前のスクランブル交差点は、信号待ちをしている若者たちで、ごったがえしていた。いつものことだ。

その時、突如、女の悲鳴があがった。

人波が大きく割れる。

レゲエスタイルに髪を編んだ、背の高い男が狂気にかられたように、ナイフを手にあはれている。

彰は、とつさにカメラを構え、近寄っていった。

男の表情を追う。目が据わっている。男は奇妙な大声をあげながら、やけくそのようにナイフをふりまわしていた。

悲鳴が、あちこちであがる。

男は黄色い長袖の上に、半袖の赤いＴシャツを重ね着していた。紐の長いサイケデリックな柄のポシェットを、肩からさげている。ポシェットは、男の動きに合わせて振り子のように大きくゆれた。

彰は、さらに男に近寄っていった。

レンズを向け、シャッターを切る。

目の焦点は合っていない。口は、半開きだった。

彰は、連続してシャッターを押す。

群衆のなかから「危ないぞ」という声があがる。自分に向けられたものかどうかはわからない。

その時、後方から警察官が駆け寄ってきた。

警察官は男に足払いをした。男はあっけなく地面にころがった。そこに警察官が馬乗りになる。

男は「バカヤロウ」「何するんだよ」などと、うめくように声を出していたが、手錠をかけられると、すぐにおとなしくなった。

警察官にひきずられるように、男は連れられていった。

男も警察官もいなくなると、交差点前はまたすぐに元にもどり、人波が幾重にもできた。カメラを手にしたまま、彰は我にかえり、おかしくなった。

反射的にカメラを構え、男の近くに寄っていったが、危なかったかもしれない。

昔から、平穩に過ごすよりは、動き回っていたかった。

だが、そんな生活に少し疲れはじめてきたのかもしれない。

……二カ月後には、恵美と結婚だ。

最近では三十七歳という年齢を意識するようになって自分にも、我ながら驚く。潮時なんだろう。

恵美は、いとおしい存在だ。恵美が笑うとあたりが明るくなるようだった。オレだけを見つめているひたむきな視線が、いつも彼女の想いをつたえていた。

……四月も、もうすぐ終わる。

都内では、さくらも散った。

なのに、いま、目の前をさくらの花びらが横切った。ピンクの小さな花びらが、彰の目の前をひらひらと風にのり、何枚も流れていった。

信号が青に変わり、人々が動きだす。

交差点の途中で、空を見あげる。

くもり空だった。

ビルの先端に、うっすらと、月が出ていた。灰色がかった空に、うすく青くその輪郭だけがうかびあがっている。

一週間前の不思議な出来事を反芻した。

ポストに白い封筒が入っていた。消印はない。宛名も差し出し人も書かれていなかった。なかをあけると、白い便箋に「あなたを待っています。はるか」と、それだけが書かれてあった。

そんな……そんな、ばかなことがあるはずがない。

彰は、その便箋を、にらみつけるように見つめた。

だが、それはまちがいに、五年前に死んだ恋人、はるかの筆跡だった。

『……待っています』

『あなたを待っているわ』

『ずっとずっと待っているから』

彰の耳元で、はるかの声がよみがえる。

はるかとは、彰が運転する車に同乗していた。その時、反対車線から飛び出してきたトラックと衝突して、死亡した。彰の怪我は、かすり傷でい었던のに。

病院にかつぎこまれたはるかは、一週間後に息をひきとった。

つらい一週間だった。

彰は、病院に詰めた。

『何も望まない。ただ、はるかを助けてくれ』そう、祈りつづけた。

一時、意識を取りもどしたはるかは、酸素マスクのなかで何かをつぶやいた。

近くにいた看護婦がマスクをはずした。

はるかが、か弱い声で、「ここはどこ？」と、聞いた。

「病院だよ。一緒に車に乗っていて、事故に遭ったんだ」

集中治療室から、個室に移されていた。

助かる確率は五分五分だと医師に告げられている。はるかからだの身体は、何本ものチューブでつながれていた。

しばらく黙って彰を見つめていたのは、正確に事態を把握しようだった。

「アキラのせいじゃないからね。事故に遭ったのは、アキラのせいじゃない」
心を読まれているようだった。

「ごめん」

それしか言えなかった。

「大丈夫。わたしはいつだって、平気」

「あんまりしゃべると疲れる。眠った方がいいよ」

彰がそう言くと、うなずいた。

そうして、「わたし、待ってるね」と、彰を見つめた。

えっという顔をした彰に、はるかは静かに微笑ほほえみかけ、

「わたし、待っているから……」と、目を閉じた。

結局、はるかは、そのまま帰らぬ人となった。

彰は、便箋を見つめたまま、そんな記憶を打ち消すように強く頭をふった。

そんな、ばかな……。

はるかが、生きているはずがない。

葬式にだって参列した。遺影を前にどれだけ泣いたことか。いいや、最後は涙さえ出てこなかった。

毎年、命日には横浜の日野にある墓地に、墓参りしている。

いったい誰だ！ こんないたずらをしたのは。

しだいに、腹がたってきた。

だいたい消印がないっていうことは、誰かが、この封筒をポストに入れたっていうことだ。しかも、はるかのこの手紙を、そいつは持っていたということか？

だが、最後に、はるかが彰にささやいたあの言葉は、彰以外、誰も知らないはずだった。結局、その晩は、いろいろ考えすぎてしまい、なかなか寝つくことができなかった。

彰は、文化村通りに向かった。

前方から来た八十歳くらいの老女の姿が、目をひいた。

白髪を短くカットし、紫のメッシュに染めている。丸くなりかけている背をできる限りのばしたような姿勢で歩いていた。あざやかなブルーのニットは、胸が大きくあいていて、

鶏がらを連想させたが、本人はそんなことは意にかいさなという表情をしている。顔の皺は隠しようがなかったが、深紅のくちべにが、彼女の存在感をひときわアピールしていた。

渋谷には、いろんな人種が棲息している。ここは、若者たちだけの街ではない。ミニシアターも、十館以上はあるし、老舗しにせのライブハウスも、まだまだ生き延びている。

日曜日だった。歩行者天国となっている路上では、大道芸人たちが、思い思いのパフォーマンスを演じている。ピエロの格好をし、パントマイムを演じる者。綱を張り、その上を渡る者。ロックの演奏をする者。さまざまだった。

彰は、昨日、届いた二通目の不思議な手紙のことを考えた。

その手紙には明らかに『意思』があった。

オレにそこへ来い、と告げていた。

二通目の手紙は、同じようにポストに入っていた。やはり消印もなく、あて名も差し出し人も記されていなかった。

なかをあけると、ワープロ文字で、

『渋谷・Bunkamura・ギャラリー・二時』と書かれており、今日の日付が指定されていて、最後に「はるかより」となっていた。

いたい、どうということなんだろうか。
とにかく、そこに行ってみるしかない。
腕時計を見ると、二時五分前をさしていた。

2

Bunkamuraの一階にあるギャラリーでは、油絵の個展が開催されていた。
入り口には胡蝶蘭こちょうらんの生花が飾られている。

会場のなかを、ゆつくりと見てゆく。

「ビビアン・ケイ」という香港生まれの新進画家の作品だった。その画家の名前は、今日、はじめて聞いた。

ビビアンの絵は、淡い不思議な色調のものが多かった。中間色が特に美しい。

絵は、白い壁にかなりゆとりを持って、並べられている。照明も、暗すぎず、明るすぎず、ちょうどいい。

一枚の絵の前で、足がとまる。

それは「砂漠の月」という題名で、十号ていどの小品だった。

砂漠に月が出ている。

しかし、夜の月ではない。

昼間の月だ。

うすく青い空に、淡いレモン色の月が描かれていた。

そして、絵の題名の下には、

『月に罪があるとしたら、それは夜しか輝かないこと……』

人に罪があるとしたら、昼には月が見えないと思っていること……』

と、書かれてあった。

鼓動が速くなってくる。

そんなバカな、という思いと、いったいこれはどういうことなんだという思いとが、交錯する。

その詩は、はるかのものだった。

はるかには、時折、詩や俳句などを書いては彰に見せた。

彰が、「いまに、詩集にして出せばいい」と、言くと、